



里見八犬傳
九輯
五十二

曾
600
290



600
290

南總里見八犬傳第九輯卷之五十二

東都 曲亭主人編次



第一百八十勝回中編

延命寺小義成牡丹花を賞ま
富山の崖の念成送題の歌を見る

登時義成主の狐龍化石の奇談を感嘆愈々
儀形も向ひて物の化石の珍かたを
殺生石の事と作者あり又人の化して石を
媛又秩父重保が妻の如死に共其古蹟あり
あもるある外漢の張良が師とす
るま就中狐の龍化石
事との心算も大学和漢の字の富り必意見ある

八犬傳九輯卷五十二

文英堂藏

変り礼儀答々。然し愚按あつたも化石の事。水土の流る壁。那化石谷の如く鼻紙まれの拭かれ其溪水の浸ま。二十四日及ぶ時。化して石の如くを見て知る。又那望夫石の如く。萬葉集。筑紫志海。松浦佐用媛。夫恋。領巾振り。より負る山の名。と云歌あれ。恐らく古俗附會。又て海邊。望夫石の偶人形。似るを見て。望夫石の名。と負せし。小の。ひの。唐山。望夫石あり。和漢同見の談る。又那張良。下邳の滑橋。六韜。二畧を傳授せられ。黄石公。未生の人也。寓言の。其實。張良。已。術と神。せん。黄石公。と異人を作設。後十三年。を歴て。其師の化。て黄石。石の作り。不逢。ある。時の。人悟。して。傳へ。故事。不。成。なる。小の。ひの。縦。是。等。の。あり。と。も。求。め。く。必。と。ま。べ。る。故。不。聖。人。の。怪。力。乱。神。を。語。さ。ひ。開。き。左。ま。れ。右。も。あ。れ。狐。龍。化。石。の。事。を。憶。ふ。

他命終る。必し石の如く。思ひて。石の作り。なる。小の。ひの。縦。是。等。の。あり。と。も。求。め。く。必。と。ま。べ。る。故。不。聖。人。の。怪。力。乱。神。を。語。さ。ひ。開。き。左。ま。れ。右。も。あ。れ。狐。龍。化。石。の。事。を。憶。ふ。北。越。下。野。を。て。大。風。雨。の。時。鐵。小。斧。の。修。る。石。あり。小。鏡。の。修。る。石。あり。雷。谷。雷。鏡。と。喚。做。る。或。り。真。利。根。石。と。名。の。是。等。の。風。吹。賜。れ。沙。礫。の。雲。雷。の。氣。蒸。れ。凝。り。形。を。做。せ。る。別。し。其。石。あり。是。を。申。り。之。を。親。れ。狐。龍。の。化。石。も。の。理。不。多。く。他。既。不。數。盡。て。命。終。ら。ん。と。時。雲。雷。の。氣。蒸。れ。石。の。作り。て。隊。する。ら。ん。と。思。ひ。疑。ひ。も。る。く。飲。ち。只。愚。按。の。及。ぶ。所。を。稟。上。る。の。事。を。答。詳。る。け。れ。義。成。王。の。修。る。石。大。塚。大。江。政。木。等。の。三。士。も。俱。不。感。服。を。并。か。中。小。義。成。王。の。憶。も。額。を。拍。て。大。學。説。の。誠。好。大。阪。下。野。の。智。玉。を。學。問。も。亦。淺。薄。を。ね。我。回。を。每。其。谷。中。ら。ま。と。の。事。を。然。る。を。又。這。大。學。あり。禮。讓。の。事。の。理。を。究。め。る。も。學。問。の。力。を。と。稱。ふ。三。士。等。も。御。意。の。如。く。と。答。け。る。當。下。大。江。仁。の。事。狐。龍。化。石。の。奇。談。中。に。

似されども又一奇談の館のしき聞一召さきや一向人の噂の妙も大禪
師の去歳より一延命寺に在りて法務の暇ある時忽焉とて那地遺
人を見を知る者かかゝる事日毎に稍久く身隨ふ衆徒も是を怪
しむ禪師豫より徒弟念成の教示を以て我方丈の居る時倘火急の
所要ありて我を請ま欲する汝本尊を念下まつりて連り小鉦をうち
鳴ね然らば必驗あり我立地かかる來てん努る疑ひととのれ念成則
其意を以て事ある時教の如く鉦を鳴りて請來てま禪師果して
响の心とて忽然と交り來り勤啓を就て正常の如く念成を訝りて其
往復する地方を問ふ禪師答せり笑ひて開き汝們が知る所あらば
後々不至りま悟るやあらんとひけり有徳程の富山の伏姫神の神社
詣る者時とて那品山麓の頭雲霧深く起龍て拜れぬる日もこれあり

又樵夫などの富山に入りて品山麓の邊を過る折も件の雲霧起龍て品山の
内へ讀經の聲の響の如く日もあり又多芥の音木と穿り數釜の槌音も響る日あり
ければ其人牧馬に怪し人々告るをせり言遂に延命寺へ夢を承ける是は
なれ念成の稍悟るやありて原來師父の暇ある毎に富山に造りて品
山麓の龍のふせあらむとて思へども觀面を問質さへはまがせ尚疑ひを
解せとてその奇事ゆゑに或る遮莫風聲の響るれば虚實を知るべしゆ
禪師の参より一折を問せぬ分明らんと詳に告宣せし成孝も俱に
や其美の臣等もやかど事怪れ過れば然も虚實を測難て宣上ま
ひひたといひ孝嗣も亦やう臣等の逆旅に在りて其風聲を夢に言ふ禪
師の道德を推し時尸解小等して蟬脱の通力とやいひけん虚談の
ありとて衆評を義成主うち多し親兵衛が言具也大全が所も亦所

八代傳心集卷五十二
三

以あり。因て我憶ふ。大の素より老實なる出家人なり。世の常言ふらぬや。正法不思議なり。非除、大の道德熟して。通力自在なりとも。幻術外道に等し。勿念出沒不測の仍いあら。君子に及く信をばら。但一大学のそのものも。意見もあら。欲と向ま。礼儀額と衝く。否臣等とも必然の。美の尊上か。いへ。禪師の出沒不測なるも。那幻術も同か。目今孝嗣。か。如く尸解なる。蟬脱る。譬を學の本訥法師或は智の愚夫。愚婦も。仍住坐臥念佛と。極樂往生と。樂者か。の。死期を知。其日不至り。死きも是あり。況や、大禪師の正直を。怨の。佛へ其出家の始より。伏姫上の御恩徳を。報んと。念。故。那身の。延命寺に。住持。衆徒の長。栄と。せ。富山の山。執事。て。生の。姫上の。御菩提。常。願ふ心の。移ら。身。生。尸解。と。心神。富山。往還。是。

有とま。和漢の高僧遷化の後亡骸柩を脱。他御の山澤。遊ぶ者。漢籍。尸解。の。唐の高僧傳。達摩。維。是。又我。國。野。一。休和尚。近日尸解の。只。生。蟬脱。者。是。る。則新奇。の。遷古唐山。黃帝の。夢。華。正。國。遊。又天朝。小野篁。生平。府。往還。是。の。恐。神遊。鬼幽冥。遊。尸解。蟬脱。の。異。似。也。這理を。推。時。大禪師の。蟬脱。幻術。知ら。足。然。今。其。禪師。本意。失。事。の。障。有。は。只。知ら。面。色。其。終。を。候。必。做。と。有。は。云。辨。論。の。具。義。成。主。の。感。悦。の。成。孝。仁。孝。嗣。も。精。論。を。感。け。姑。且。義。成。主。の。成。孝。仁。を。見。是。事。を。辨。論。せ。大阪。下。野。

首て自餘の武士等と政本大全に至る多。我其言を聴く。益を込るもの。其れも大學の言葉寡を。辨を好むと思ひ。那蟬脱の辨の如く。人の及る所。我疑ひ氷解せり。現に術者の腰を折る其術の如く。ある者也。好む我を。大全の逆旅の疲労も。あらん根小屋退り。休息せよ。と。升が儘身の暇を賜りて。去の日に餘談の果けり。憊而。その年致仕の老臣。杉倉木曾。小森衛士。鳥宗。浦安兵馬。兼勝等。うら續て身致す。又長亨二年。小堀内藏人貞仍も。衰病。よりて。古人。お作りぬ。あられも。杉倉武者。小直元。堀内。雜魚太郎。貞住の既。親の職。と。紹。家老。より。又。小森。但一郎。高宗。浦安。牛助。友勝等。の皆。當職。あり。然。又。その年の夏。四月。十六日。小義實。老候。卒りぬ。義成。父子。君臣。の歎。の。も。あらざ。其。安葬。の。夏。見孫。親族。執喪。の。も。都。皆。潤。ら。ぬ。を。看。官。宜。く。猜。ま。へ。余。程。小。近。園。

他御の大小名。里見の仁義。武蔵。感悦。一。或。英武。不。憚。る。者。各。使者。より。好。む。結。ま。す。却。其。諸。家。の。足。利。左。兵衛。督。成。氏。千。葉。公。自。亂。首。老。下。總。中。千。葉。新。公。孝。胤。常。陸。の。佐。武。高。久。鹿。嶋。の。黨。武。藏。相。模。六。扇。谷。山。内。の。兩。管。領。三。浦。陸。奥。守。義。同。長。尾。判。官。景。春。等。和。睦。の。後。使者。往。來。して。會。盟。不。叛。を。乞。ふ。又。甲。斐。の。武。田。信。昌。の。家。臣。甘。利。堯。元。を。使者。として。安。房。へ。遣。し。又。三。河。を。隣。尾。判。官。伊。辺。の。使者。錦。織。機。馬。伊。勢。の。國。司。北。畠。中。將。の。使者。網。更。平。太。夫。周。魚。等。各。稻。村。の。城。來。聘。して。海上。通。船。の。好。む。條。を。義。成。則。是。を。受。て。更。不。登。崎。十一。郎。照。文。其。女。婿。十二。郎。照。章。田。稅。戶。加。賀。九。郎。逸。時。若。屋。八。郎。景。能。等。と。各。禮。の。使。として。件。の。諸。候。の。居。城。へ。遣。ま。し。贈。物。各。差。あり。是。より。年。毎。小。嘉。例。と。做。り。て。義。通。の。時。是。の。疎。ら。ざ。り。ける。最。後。小。結。城。の。

判官成朝の能化院の權僧正影西と小山大夫次郎朝重と使者と
まて里見と好結比一が義成も亦、大禪師が大江親兵衛檢校照
文と相副て結城へ遣へける事の趣の前板百二十九回見ると如く又服
大刀自の義成の仁義に感服して和順の思ひありといへども女流るれ好結
お及びを口稲戸津衛由元の三年の春毎使と大川大田許遣して義
成王の爲ふ千歳と壽延ける是より房總を異ちて敢て干戈を動さるる
四民業と樂と不孝の子不忠の臣も、畔を看畔と讓り商ふ者い
價と貳せを路ふ送るを拾を夜戸を鎖さる年お世に凶る。鰥寡孤
獨も饑を凍む皆是義成主の仁義善政の餘るる民の是を仰ぐ
日月の如く赤子の父母と慕ふ不似る然る里見の封内かゝの如く異なる
と八犬士が俱に休暇の命を賜て各其居城に在り其内や八犬士が稲

八犬
八犬
八犬

村小在勤して代るお半年を以て但年首五節供の拜禮臨時吉凶の
參勤或の事の決一か折の八犬士皆參集ひて國政の與りけり。既
文明の十八年を盡し且長亨も亦二三年おして延徳と紀元
せらる延徳より又明應と改りぬ嘉吉元年より明應九年お至りて星霜
六十年を歴りて這年四月十六日、結城落城の昔と偲ふ季其基朝
臣の六十年忌義實老侯の十三年忌小下るどりてその日義成主の早天
より稻村の城を出て延命寺へ參詣あり而家老杉倉堀内有司近習の
毎伴當より又八犬士の參會曾と既おく廟基焼香の事果て義成主の
客殿お在り住持、大禪師、沙弥念成をりて看茶の礼あり八犬士大塚信
濃成孝犬阪下野瀧智犬江親兵衛仁犬山道節帶刀忠與犬村大
学礼儀犬川長狹莊八義任犬飼現八兵衛信通犬田豊後悌順兩

八犬傳卷之二十二
六

家老杉倉武者助直元堀内雜魚太郎貞住をゆりける折々這客
 殿の庭に牡丹花開滿て紅白色と交へる香風馥郁とく得ゆれば
 香弄あるれ義成主へ立難て端近く居り、大禪師は法談を
 憶む時を移し其語次へ大のひき臣僧當山は任持を素より
 情願ふゆゑも恩命黙止かかれ既ふ十七八年を厭せり亦肉を如徒
 弟念成八年來お作りぬ尚壯年おゆれも佛學既お煉熟して法脉を嗣
 軍の傳燈の素懐を遂て身の暇を賜り多く欲を這義を饒ませぬ
 か。亦他事も多く請稟せ義成は沈吟して其情願の今お創め
 禪師當山は入院の比老館の論ひて十稔と契りあり今さう林示ぬ
 かゆれも我年來疑思お由あり禪師身の暇を毎お忽焉とて寺お居
 らま留守る念成若く所要あり急お請多く欲する時の本尊とて念

あて連りお鉦をうち鳴せ禪師亦忽然と寺かへり來ぬふあはれや
 又富山お入る者那品山岨お禪師の經を續聲ゆえ又有一時木を穿
 らぬ金の音も日も是ありまれば其形體を我其嚙とゆて稍久く
 るりぬれども折折るれば向ざりぬるの狭のふむと問れて大の驚馬く色
 る。然ん且始より稟上ん臣僧祝髮入道せよ施王の款待おあはれ
 敢亦火食せむ日毎お蔬菜果子と生食して只水と飲の願ふ所伏
 姫神の御菩提と當家の御子孫敬慕昌と祈ると問断る。あ故身
 當寺の方丈お存の心富山の品山岨お存約莫かくの如くふ喜怒哀
 樂の境を免れ榮枯得失好憎褒貶お推念せられ我身の有と忘る時
 ありあをりてゆき欲する地方おれ忽焉とて適さるる還す欲され
 忽焉とてかへらるると。然ればとて脚地を踏まを雲お駕ふあはれも出



八十九卷之三

天海遺集

設思の隨るは是何等の所以るや我のまゝ是を知らず我知らざりて
 自在なるに那世を厭ひ山に入りて遂に形を煉り性と易て品居水飲修
 して神仙の成る者不似たり但神仙の成るは佛も亦雲不駕り波と踏む
 法術を量るると佛を稱て金仙とを開け左も右もあれ臣僧必自由
 疑はれ立地小悟り人召時へ遠くも空也と念成が請ふ
 とありく鳴を鉦富山ありても我耳小入れり壁言ハ唐山魚の曾參が至孝
 するは日暮るるまかへざる時其母俟不樂て則門小立出で望ま指を
 噬時ハ曾子の胸忽地痛て母の待とを知る故の死てかり來ぬが如し
 蓋念成が老実る師の仕方の誠心の鳴を鉦るれ幽冥不通を
 るべし世の神佛を祈る者ハ利益其人の至誠深信在り誠ハ必神の
 如し那鉦念成が鳴まふあざれ遠く我耳小入るる是其誠を知る

へ死の心小往る文明十八年の冬は這白濱ハ波濤の打寄ける異圓
 材あり其材の周匝十圍許長ハ一丈五六尺るべし其色黒くして香氣あり
 聊削合て焼試る疑ひもる沈る臣僧則木匠小課て其材切
 斫せ分ちて五十五材と是を富山の品山出小藏めり多れども人は是を知
 らず是より後臣僧暇ある毎小飄々然と富山の崖小造りて旦夕ハ
 姫神の奉為小讀經法をなり書ハ則其材と刻て須弥の四天神王と作
 正なり又二十五の菩薩と二十五の古佛を為り奉て其餘材をのり數珠
 一聯と刻ゆる約莫這細之の歲月十五年ゆく稍落成仕る是を當
 寺にて彫刻せざる寺内ハ尚俗氣あり今の法師ハ寂滅為樂の教と思
 へ富貴利達を願へ又富山の神崖小詣る者も樵夫も臣僧を見る
 ことば況刻做し佛像ありを知らざる雲霧發起龍ハ依ふあり其

人々の凡眼汚穢れて。視ども見ることをばざる人既に古佛諸菩薩五
 十體の開眼ままらうかども四天神王の御眼をばるに定まらうかども
 士等も商量ままらうかども思ひまらうかども其美及ぶに館小向れまらうかども憶
 まらうかども辯はらうかども佛像の尚神窟小在り。數珠の當寺の什物おせまらうかども思ひて
 念成お取せらる疑しく思ひまらうかども御臨見お入れ亦肉せとの念成を念成あらる
 身と起し。數珠櫃より。數珠と念成を蓋お載て義成主小見せまらうかども
 ろふもまらうかども念成まらうかども異香一室お満らうかども義成主の妙小奇し其言と
 听くのまらうかども數珠の異香お敬馬に感てまらうかども念成まらうかども
 有り。禮儀と見らうかども大學汝が昔年の辨論も當らうかども念成まらうかども
 禪師の直話の町寧まらうかども疑ひを解お足れり是見よか。渡りの數
 珠と禮儀受戴して御誂の如く禪師の道德神通自得の妙要の這數

國
 山

珠也の猪せらる昔年臣等が云々と推量す。疎之心裡恥ぢけり。合て
 件の數珠を自餘の犬士お遞與て見まらうかども孰く感嘆せまらうかども直元も貞住
 も俱小奇異の思ひお做して。數珠を念成お返しけり。當下義成主の又、大お
 うち向ひて。喃禪師這義不就て八犬士お何等の商量あるやうかと問れて、大お合て
 小か。否別議あらうかども伏姫上の御紀も。那水目の數珠の多も役行者の靈
 物も。赦お後まらうかども九僧の多も落まらうかども。這故も那數珠百顆の玉をりく。
 五十體の佛像の玉眼お仕りぬ其辨識の八箇の玉と大士お合て須弥の四天の
 玉眼おせまらうかども欲て開眼遂お具足せの臣僧又宿願あり件の須弥の四天神王を
 當國安房の四隅小塵ゆ。最も畏た平安京も將軍塚小擬へ。十世は李
 王で動らる當家御子孫の為小守護神お做るべし。又二十五の古佛二十五の菩
 薩の御封内當國を。鋸山小安置し。堂と造らる。并小儘小分て件の山小塵

此是佛種之執言の式之臣僧嘗鋸山を相きふ正房總第一番の
 佛地今如の如く做さ時二百年の後に至りて我座め種佛五十體
 倍せ五百の石佛を造り立て伴の山措者あら後未知るべもは倍願を
 果し速身の暇と賜りて富山入りて終を俟ん這美の館小景上るのふあ
 ら大士達も少の昔年水陸施餓餓の折各所藏の靈玉を我返さんと
 我這宿願ある故代る至羅龍龍の玉をのせり余る其羅龍龍の玉の返
 金蓮金花と做りて散乱して消滅する今按ざる不蓮の其字押は従ひ
 車不従ひ是も従ふ輪回の車の回る如く則是當館の仁心善政の積徳を
 恩怨忘報の輪回正不盡るの兆るべ又各所藏の靈玉仁義我八行の文字あ
 りこの仁君仁中て臣も亦仁るべ別仁義八行と名る者る老子所云大
 道廢れて仁義起ると是人所云大道に至仁至善人至仁至善るべ不仁不善

と名くべ死者る大道廢れて不仁者あり悪人あり於是乎聖人仁義礼智
 孝悌忠信の八行を立てて人教人を教言ゆる和殿等八犬の俱八行具足此
 人何ぞ其文字の見れる靈玉の眞助の負んや縦其玉あるも各八人の一
 生涯の姫神看垂の目今玉を我返すねの四天の玉眼おせ古俗
 良將の勇臣の殊小勝れると四人擇て是を須弥の四天小擬へての四天王と
 稱者者尠る所云源頼光朝臣に従事せる衛府の勇士渡邊綱阪田
 公時ト部季武碓氷貞光是は這他源義經主の勇臣龜井片岡伊勢
 駿河義貞朝臣の勇臣栗生孫條塚畑巨利皆是人の知る所枚擧る不違也
 然る當館の那四天王一倍せる八犬士の賢臣あり這八犬を四箇小約めて四
 天の八目と做さ時八犬中て四天へ天一不従ひ大不従ふ四天中八犬大不従
 ひ不従ふ八犬變て四天と做りて永久當家の鎮守と云抑亦よと云と云

辨論精細るのけれ義成主と首と諸大ニ家老感服して異議者者
 るるける開が中成孝胤智仁者かあや目今師父の教諭不就と思ひ合ふ
 事アそいへ臣等が感得の靈王の生平の護身囊の藏りたる月の朔望毎
 合ふ出で拜者のを介る昨日の例の如く出で拜まはゆる程の文字の耗
 故の白玉の作りぬけり開八臣等三人の玉のをこの這美を自餘の犬士未問ふ道節
 大學社以現八豊後等が藏りたるも皆白玉の作りぬけりといふと告れ現八校と出
 又只玉の文字のをる臣等八人が身在る瘧子の形狀牡丹の花に似し
 隣國和睦の比より其瘧子年々薄く做る隨ふ本月に至ると皆銷耗
 迹る做りぬ然ども義兄弟等が瘧子の或の脚或の肋背殿股肘るも在
 故の衣は隠れて人不知れ其身も見えざるがあれも臣等が瘧子の面部にあ
 る人のゆへ鏡と照せばみづく見るふかからん是御覽せんと片頬と示せ義

わけ

成王の大師弟も直元貞住に至るまで左見右見の俱みりる現大飼の
 面部の瘧子の近曾薄く做りぬ既にして銷耗し心つたるゆへ自餘の
 諸大も恁とあるは奇く如るるふとと又忠與礼儀義任悌順の膝と杖を
 言語齊一答るやう事と物と因果あり因の始に果に終る我々が玉の文字と
 身在る瘧子の則是因に尙ある玉と瘧子との何ぞや伏姫上の御子と
 知る由あり這兩箇の照据ありて當館に徴使れて功名共做り後玉の
 文字も身の瘧子もあま做りぬ是果に這奇事の終る玉の瘧子の人の瘧子
 あり。這垢清白とまへる誠の佛法音響の方便役行者と伏姫神の利益救造
 化の小児の所為歎思議とくひと申一句乙一句送の語と續て意更と演る
 各玉と合ふ出で護身囊の載りて俱ふ大返下けり當下義成王忻然と
 犬士等うち向ひて現物の本末あり事終始あり我今日這牡丹亭の來て

汝等が身在る所の形状牡丹似たり。瘧子の比皆銷耗し正可不知。其
 瘧散て這花あり。感応とらして下。就て我這年来情地不疑。思ふやあつた
 阪下野の智玉をれば必や知る由あり。とらして流智額を衝て開け何事か。と問
 義成主合笑て然らば。汝等八箇の身在る。瘧子の形状牡丹の比似たり。
 原是八房の犬の毛色を類りたるべ。那犬の白黒死雜毛八箇の之。形状牡
 丹の花に似たり。當時我老館の是を名けて八房の犬と喚做し。是は八總
 とのりて八房と寫せあり。亦是所以。房の總も和名をさ。益房と並
 握り。婦人の乳を乳房と。其兩箇相並て總の垂る。似たり。又蜂
 巢と蜜房と。亦垂る。總似たり。あつて和訓總と房と通用。但這
 字義あり。まわら。牡丹上古這大皇國なる。延喜天曆の比。渤海國の
 商船創て載て來り。牡丹の和名と云ふ。まきと云ふ。み。渤海の假字。宗

徳帝の御時より牡丹の歌あり。且牡丹の極寒の地不宜。かむ。東南温暖
 地方に相応し。と云ふ。當時詔して其根を紀伊薩摩安房植を
 る。是より後。後々分根して今。諸國に多くあり。然る老館是等の故
 事と思召合さ。八房の名に由来し。我少かり。時御説を美りて是を知り。
 然る世の生文人の這深義あり。知らね。愁不賢。八房を改む。八總と作
 る。ある老館の御本意。不あら。開け左。右もあれ。那八房の犬の雜毛の形状
 牡丹の花に似たり。是甚麼なる。因縁を且汝等八人の瘧子の他。類り。こと
 ても。又皆牡丹の花に似たり。必其由あり。這美を解は。な。考ひ。縦
 流智沈吟。と。御説美り。い。其。美。臣。不。用。意。考。ひ。縦
 此の考證あり。事。比。皆。臣。義。兄。弟。の。身。係。り。る。隱。微。の。考。ひ。縦
 こと。大。禪。師。の。悟。道。の。後。疑。事。あれ。神。物。あり。告。る。か。如。く。立。地

發明とされしもの曾りあつて分明なりと云ふ、大い推禁めて大坂漫
 語を稟しと和殿は是生智之何もの知らざるをあらん酒家小讓はと加へ
 推辭を義成王宮あまきさるひと禪師下野が智玉も知らざるを知らば
 是則上智之曲学者の知らざるも知らばと云ふを恥とて強々臆説を傲せ
 故小胡慮ふるると云ふ禪師の只是神識之何を一言一句と惜ま我の言
 らん世の人れ疑ひを解ざるやと徴ふ、大い何と応て姑息して答ふる仰定ふ
 理り、那八房の犬の死も又八犬士出身出世も皆臣僧より出づれば件の隱
 微と解んぬ必人小讓るる然と漫小推辭の衍ゆり今臣僧が一解の伏
 姫神の教不依れり徐小聞食ねかと謝して則解ていさう、大嘗本草と
 按る小牡丹の牡丹、這故小宿根より叢生を因て名けて牡丹といふ由之
 之を見れば牡丹は皆牡丹のてゆて純陽の花又八房の犬其母犬死て狸

見小乳育れる牡狗之生涯對して北狗をいふ是亦純陽の畜生之あを
 之那身の雜毛形狀牡丹の花に似て其數八あり八は則陰數の終也陽中
 陰之十一不通故小陰數の終とせば老侯這大を八房と名けゆり後竟八
 犬士等安房小まわり聚ふて識又八犬士各其父母ありと云ふ那宿因を推
 也時伏姫上の御子也胞兄弟小同約莫這八個の弟兄は皆男子をれ純陽
 る且各身小在る所の痣子形狀牡丹の花に似る那八房小類る元自亦是弟
 兄純陽の義を表せしと云ふ陽の獨不立陰の獨不仍の故小大阪大塚
 幼仙は時より故ありて俱小女装して名亦信乃毛野るん女子小似る亦是
 陽中の陰之且大塚の濱路と云結髪の少女あり又大村の離衣と云賢妻あり
 則是陽の獨立するの姿を小濱路離衣及大江の母沼菡は皆是良善
 心烈の婦人なる非命小那身と殺せり果報虚を似れども亦故あり

九六 草木の花用てお小実を結ぶ時必先虚花あり。這虚花ありて後
壁言の草木の花用てお小実を結ぶ時必先虚花あり。這虚花ありて後
実花あり。徳れが件の二婦人の大塚大村が為小虚花あり。其心烈貞實
る名と千載の後お貽さ猶千葉茶藤花の實るて花を賞玩せらる如
既小這虚花散て濱路姫都木姫の実花あり。お小至りと実を結びて子孫繁
昌まはる者人又只塚村のまら八八大士功成名遂て俱八個の小姐と各取まらる及
ひて陰陽配偶備れり。於是乎純陽を牡丹の花に瘧子耗て。陰陽沖對の美を
表し。誠や因果も盡る時あり。無漏より出て有漏入り。有漏より出て無漏入る
小中大の三乗の人の少壯老の三齡あり。如佛是をのて教を各疑ひぬる。辯
舌水の流る如く天機を發して解論せ。義成主と首史八大三家老も俱の感
嘆の聲耳と合て玄妙とを稱ける。姑且て大江親兵衛の、大禪師に向ひて
玉の文字の耗る小就て。又一奇異のへも衆議ヲ端をければ。言後れて今及

その又別名ふひる昔仁が富山を姫神修授の神薬の東西和睦の後
異りて金瘡見お用るともみければ。年来那那龍を秘藏する。その
家僕ふ急病の者あり。かを救ふと思ひ。那那龍と用て見る。小薬の耗て
其香もる。曩も幾百幾千人お用ひても。竭する神薬の十余年と歷らる。と
銷耗する奇わざ。是を見ぬ。とのひも腰に吊る薬龍と令。令て用て示
せば。大の三とと點頭て祝して。義成主お稟に申。君飲せぬ。當國の之
る故。小死を起し。生お回す。神薬耗て。お成り。故何と。初に素素膝の逆
乱あり。後より兩管領の及代あり。這故。伏姫神。縁より大江親兵衛。那神薬と
授ぬ。て兩敵の死を救ひぬ。ハ則是君の御仁心と。帮助させぬ。る。小
干支理り。房總長。を異る。故。小姫神。則那神薬を。執復し。ぬ。り。わ。らん
世の常言。小薬の死する。病人を治し。神の高運の。凡支を。護。と。の。國。を。異。り。て

ひめめ 非命の者多く蒲團の上で病臥者姫神何を能くも神薬を授けんや
是非由てあれを觀れば愛され祥のひびくと祝せが犬士等三家老も俱に千歳をぞ
唱ける當下義成踞然と謝して答のふり我身素より薄徳るれども倘禪師の
い如くならん實に幸甚し却須弥の四天塚へ則禪師先達さるべく八犬士を總
轄せんと又鋸山植ると多種佛五千軀の政木大全江田宗盈等不下知して
く支役を出さざる然と問れて大い頭と掉て否然る物々此事の要なり那里
へ念成と支役十四五名あり事足るべし種を植る少壯兒を宜いと老人の植
たるは彼生流の若るべし却這事と果し念成の當山の住持を仰付さる
ぬして臣僧の速小身の暇を賜るべし願ふを義成主より許して開を左も右も
異日制度せ長談ふ日の蘭より卒退んと立ぬ八犬士三家老の伴の士卒と
促し聚合て稻村の城へ俱し小けり憊而有司奉りて四天を斂むは素朴の厨

子と石の韓樞佛像五十軀と斂むは小瓶をどし石陶の玉面を課する約
莫平日許ふく送り作り出せしが大禪師の念成を將て八犬士と共侶の
許すの支役を從て富山の岳崖へ赴きて大禪師の作立て用眼をける四天
佛像を中する其佛像五千軀の念成則受合て準備の瓶斂む車を登
去支役の推さる延命寺へかへ多う次の四五個の徒弟と俱し支役の又其車を
推さる鋸山を投てのをせし程八犬士の須弥の四天神王の木像と西箇の長
樞のち斂て先隊配と定むる東方へ大塚大江西方へ大川大飼南方へ
大村大田北方へ大阪大山各支役を從て立別れ路次をいそふ大い一人
岳崖へ出で犬士等告ての念成鋸山へ赴け明日より寺に留守する
酒家の這里を祈禱して白濱へ還りてん各々勉め其四天の玉眼の和殿の
感得せし靈玉をりて造りかへ是各分身の善神も相同り并に瘞る地方を

茶

酒家豫表と建ち其地を穿り一丈二尺は是地枝十二生肖象る塚と
 築くと十尺は是十幹象る四天王の配分其東西南北を分ち長
 榎小寫ら塚の表の東小柳西小楓南小檜北小冬青と栽ると好とを
 ちそと説諭せ大士等都てあるて各其投を方お到る安房の四郡
 から一兩日中て四隅の四隅を穿り是より先地方の村長社客等
 下知よりて稲村より石の榎榎と車りて牽よせて四天の昇れて
 四隅皆異なる大士等各其表木の地を穿せ天神王と素樸の厨子
 儘石の榎小斂て是を瘞る大の教不違ふと信而塚と築木を
 栽る樹も折る五月雨の時候る枯る者るりり八大士各這美を
 稲村の城へ来る程又念成の徒弟等と俱佛像五干軀と鋸山へ
 延命寺へかへり是より後大禪師の連く退院と請高宗を

成主と念成と延命寺の三の住持と則照書と賜り大を
 別坊料を宛りて大の固辭て敢て受先退院の欵を高宗
 と稲村の城へ来る程又念成の徒弟等と俱佛像五干軀と鋸山へ
 きて對面其礼果て大の臣僧尋幸の宿願と遂て富山へ入り
 還らと思へ見参の今日と涯りて就て告高宗と思ふ富山の品出
 伏姫神の禊舎と置て衆人小拜せぬの姫神の御本意あら何と
 原是富山なる觀世音の化現然姫神と拜す欲者衆生の富山の
 世音と語る如る臣僧這神慮を知る故那宸筆の勅額と山峯の
 制衣の石室藏めまろぬ今よりて後伏姫神を大悲の奥の院と
 利益御子孫不及せぬと然臣僧の那品出屋を鎖埜に長く定入
 欲まといひ八大士と見りて和殿等も穿り功成名遂て身退る

る者へ何ぞ見子職を譲り。致仕して隱逸を樂まざるや。公はたの只是の
館願く。今日より長く我身の暇を賜ふ。とらひも託らぬ身と起して。走り
度より劣る見え。忽然とてあはるるけり。義成主も八犬士も。這光景も果
俱ふ其方と目送る。又よりもるりける。姑且て義成主も悔て八犬士も語ら
量る我富山姫の勅額とて神體とて。且富山なる品山に充念と置。を祈
る。何とこれ神の形質る者。佛ハ則影像あり。是を天地に啓言。神ハ天
佛ハ地。又人身に啓言。神ハ則魂。佛ハ則魄の如し。神ハ陽佛ハ陰。陰陽の
理と知り。四祀を遙祠。大和なる三輪の神。只空扉門のこほし。神殿
る。を見て知るべし。有徳は。今より峯の奥の院。我姉神安居の地とて。春秋毎
祭るべし。這を封内なる。士民を送る。御示し。縁と仰。大士も感服して。猶餘談
を及ひ。公程も。大の伴當も。禪師あは。做りぬ。と知り。教馬は。噪ぐこ

大なるら。躬々延命寺へ走りぬ。住持念成も告。念成も亦。教馬にて
原來師父の富山におたて。定入りぬ。るらん。今一番對面せま。りけれと。
猛可の伴當と。得て富山へ赴。糸路を。日の暮。一。准備の。焦火を。掉照。を
當晚那品山。屈ふ。走り。着て。見る。不怪。む。品山。屈。最。凄。に。磐石。と。建。楯。其
入。處。を。塞。池。か。縦。身。力。雄。の。神。へ。も。輒。く。開。く。も。あ。ら。ざ。ま。念。成。憶。を。嘆。息
を。原。來。對。面。を。饒。さ。れ。と。品。山。屈。ふ。ら。向。ひ。て。跪。け。念。佛。し。て。退。り。て。稻。村。殿。を
告。宣。さ。え。と。其。方。と。投。て。い。そ。程。も。既。中。て。天。の。明。け。然。し。又。大。の。早。大。江。親。兵。衛。
義。成。主。の。仰。ふ。ら。と。大。禪。師。の。在。處。を。索。て。君。命。を。傳。ん。と。伴。當。と。從。て。富。山。を
投。て。も。程。も。途。中。念。成。小。逢。一。件。の。趣。を。知。り。も。も。甲。斐。有。と。思。ふ。も。只
得。念。成。と。共。侶。不。稻。村。の。城。へ。か。り。事。任。々。と。穿。え。上。れ。義。成。則。念。成。を。言。よ
せ。と。み。づ。く。其。委。曲。と。穿。ぬ。念。成。が。事。那。品。山。屈。を。塞。池。に。磐。石。を。非。如



八代傳公卿卷五十二

十九

大と起て
 親五衛念成
 富山小判



ちりり
 ちりり
 ちりり
 ちりり

無原

朱打

百千人の聲力ありとも。輒く啓くべし。其大石の書寫去り歌あり。あや亦
浮世の人此訪来れば空しく雲を身をまうせんと。讀れるの外あり見る所由の
正と云を義成主打家を開合歌。新詠と向ふ。親兵衛谷て古歌より有昔
建武の比中納言藤房卿出家徳道の後み。保山子と號して越前守
雁鳥巢山幽栖あり。時新田の勇将畑六郎左衛門尉時能が其頭陣あり
けれは士卒水を徴め難て山深く入る程に藤房道首出でて訝りて其出処を問
ふ。實を告ぬるに東國の者とのと答ぬひか。士卒等々之訝りて。軀てか
あく時能を告る。時能は開合必藤房入道とてまへに我れ見んと
みづらう其地方に至る。王の御立去りて坐する石に寫述あり。件の歌あり。其
事物を見えては禪師は是を思ひよきて。其古歌をて心操と示されし事と
考照具る。けれは義成の嘆嘆小堪。原來幾番訪ふとも。對面稱ふるも。

とて竟ふとの談に已おけり。是より後富山に入る者折々那品嵐ゆ。讀經の聲
まると少とあり。徳而許すの年と麻里。里見四代の國王實亮。先板第九集四十一卷
と寫す。暗記の失ふ。の時樵夫の富山に入る者あり。一日一個の老僧忽然と出
當實亮の作るべし。の時樵夫の富山に入る者あり。一日一個の老僧忽然と出
來て。送不樵夫と喚ていさう我の。大禪師は汝我為。柏村の城に參りて實亮
主事告ふ。御父祖の俊徳稍衰。内乱將起。宜く仁義忠孝を宗とて
善政怠りぬると言傳ふ。汝方立忘れと宣示して走ると奔馬の像を忽地見
えざるのけり。あれども件の樵夫の言の已む。死に憚りて這美を訴さる。果
てて京宅も違はる。ける。是後話。是より先大田豊後。居城せる那古の浦に
一名を鏡の浦と云ふ。這地方の棘鬚魚。安房の名物。され。平生困守。献て
りて食膳の料と云ふ。又政木大令。居城せる大田木の棘鬚魚。も上總の名物。と
ども吹遠ければ守の食膳不備れ。遮莫大田木の漁夫。猶誇りて我浦の

棘いのうを長る瀨魚る那古る勝るれりるといとい大田る豊る後る少る知るりる有る年るの春る塩る鯛ると政る木る大る
 全るの贈るるるとと歌ると詠るて遣るける其る歌る曳るあるるる霞るの網るふる浪るの花るさる鯛る
 那古るの浦る裏るとありる一る終る政る木る大る全るも亦る塩る鯛ると大田る小る贈るるる歌るとて返る
 と其る其る歌るあるの海る八る重るの潮る路るのさるらる鯛る名る小る大田る木るをるうるのるとらんる後る小る
 義る成る王る這るるるとと傳るへるて贈るるる合る共るの感る心るのあるまるりる又る々る大田る木るの棘る長る瀨魚るをるも
 食る膳るふ備るよるとて甲る乙る俱るの徴るされるかる大田る木るの浦る人る歎るびるて遂る小恒る例るふる做るりる小
 けるの徳る而る義る成るの徳ると慕るるる近る國るの氓る多るく取る歎るひるをる上る總るの郡る縣るもると敏る昌る昌る
 あるらる一るかる政る木る大る全る利る害るを演るて請るふるて処る々るの要る害る小城るを築る小くると勢るかるら
 此る後る竟るの四る十八る个る所るみる至るりるかる世るの人る相る傳るへる是るを里る見るの四る十八る城るとらんるける
 是るらる下るへる又る本る回るの下る編るみる鮮る分るるると聴るねるかる。

南總里見八代傳第九輯卷之五十二終

